那須祐直君音譜

# 新案 薩摩びは歌

東京 小川尚榮堂發行

# 序

若夫れ、武士的音樂なるものありとせば、彼の薩摩健兒の愛吟する薩摩琵琶は正しく其重なるものなるべきか。三筋の糸の柔弱なる氣風を招くなるに、四筋の糸の尙武の精神を皷舞すること如何に多かるべき。近時斯の曲の學生間に流行を極めつゝあり、畢竟その歌の雄渾にして、その曲の悲壯を極め、おもむろに撥を按じて一曲を彈ずれば、勇壯快活、以て精神を奮發せしむるに足るべし。本書は斯道の名家那須氏が正確なる曲譜を附したるもの、

其の第一輯を發行するや、大に世の歡迎するところとなり、爾來版を重ぬること數回、今また第二輯を發行し、兩者を通じて有ゆる名歌を蒐集せるものゝ如し、同好の諸子は本書を懷にし、月下樓上一曲を彈ぜんか、心神恍惚として恰も鐵火飛び、刀鎗鳴るの感あらんか。敢て本書を諸子に推薦す。

明治丁未のとし一月

小林鶯里志るす

# 凡例

凡そ薩摩琵琶をはじめ、其他各種の歌を謡ふに何れも其歌の定節を知らざるべからず。頃者百般のこと、多くは便法を案出し、琵琶歌の如きも印刷物とし、其文章に符號を設け、容易に定節を知得せしむるに至る、之れ斯歌の妙趣を普及せしむるに甚だ力あるものなるも而も其れに由つて完全なる定節を知るは固より至難の業にて、若し斯歌の妙奥を探らんとならば、必ず師の薫陶の下に熟達せざるべからず。抑も琵琶歌は他の歌曲と異なり、大體の定節即ち「切。

# 凡例

り」「大かん」「中かん」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も間其中間に至つては或は各自曲節を異にする個所なきにあらず。古來の傳說に、中間は地中及びかん音（山形）に謠ふべしと云ふも、歌は抑揚のみのものなれば、其歌の種類に依りて曲節を付すべく、假令ば端物は定節を知り山形に謠へば好しとするも、段物即ち歷史的のものに至つては、必ず文章に依りて節を付すべく、畢竟其歌の目的は何れに在るかと云はゞ、聽者をして感動せしむるにあり、故に勇壯なる個所を大かんに、悲哀なる個所を地に謠はざれ

# 凡例

は、如何に文章妙を得たりとも到底眞情を穿ち得ざるべく、开は謠者其人の巧拙に由るものにして、斯道名人たりとも聽者に感動を與へざるに於ては何の甲斐かあらん、固より琵琶歌は琵琶に傚ふて謠ふものにあらずして、歌に由つて琵琶を彈ずるものなれば、其曲節に變化なくんば、如何なる妙手も充分彈ずるを得ず、即ち初心の人にあつては、琵琶と歌とを比較し、前者は入難くして後者は入易し。然れども、入易き歌も其蘊奥を極むる迄には、能く熟練の功を積まざるべからず。予、斯道に遊ぶこと久し、而も未だ眞情

を謡ふこと能ず、幸に古來の傳説を便つて研究するところあり、現時各所に招聘さるゝこと甚だ頻繁にして寸暇なしと雖も、尙榮堂主人の切なる需に應じ、聊か拙技を彈じ、各其文章へ左の略符を施し出版發行するを諾す。若し夫れ本書に依つて同好諸士の參考ともならば、予の幸甚とするところなり

那須祐直述

# 新案薩摩びは歌目次

# 目次

目次

新案 薩摩びは歌目次 終

# 符號

「」 段落　　・ 大かん

） 中かん　　● 吟替り

（ くずれ

新案

# 薩摩びは歌

那須祐直　音譜

## ○松囃

新玉の歳立かへる春の日に。君が齢は千歳經る。松囃とて數ならぬ。我等如きもゆるされて聞くも「中々面白や」。「大が鼓は四海の浪の音」。笛は龍王の吟ずる聲尚高砂の尉と姥。戀ぞ盡せぬ妹脊とかや神の御前は鈴鹿山。惡魔を拂ふのみならず。弓矢の譽殘されし尚田村麻呂の御威勢は今が代迄

もゆづる葉の。しめひき廻す井筒より汲ごつきせぬ若水は老を養ふの便とかや。扨又其次は春の花都に聞ふる三條の古鍛治宗近は。心正直にして神慮に叶ひし名釼を造出して今は又太平の代となりて古き詩にもあるぞかし。長生殿の内には春秋を富み不老門の前には月日遲しと申せしは皆彼の心をぞ學ばれて。今此御代と云ふつげの。取々なれや梓弓。矢竹心の一つなり。又英雄者の変りには頼みある中の酒宴かな。

切込はゞ中音にして其切りの次はいづれも大かんに謡ひ中に切り一ヶ所及中かん有り跡の切りあり終りは裏祭（うら）にて謡ふべし並に松囃を符に記せば

**松**

十九八七

新玉の歳立帰る春の日に　君が齢は千歳ふる　松囃とて数ならん　我等如きも供するされ（間）　中々面白や　鼓は四海浪の音　笛は龍王の

**囃**

十九八七

吟ずる聲も高砂の　尾上の松[illegible]　[illegible]　[illegible]　蓬莱を[illegible]　其の[illegible]されし　[illegible]

**松**

十九八七　丸の御威勢は今が代迄もゆつる雲の しめ引廻す井筒より 汲めどつきせぬ若水は 君を壽ふの願ひ 其次は ちかや 幡又

**雛**

十九八七　春の花 都に聞へし二條の古跡 宗祇は心止め [illegible] く御膳に叶ひし名観を作り出して今は又 太平の 御代となりて 古き詩にもあるぞかし

**松**

十九八七

[illegible]三點の内[illegible]に審[illegible]を[illegible]が[illegible]問[illegible]則[illegible]皆其心[illegible]て[illegible]今[illegible]

[illegible]の[illegible]取[illegible]

**雛**

十九八七

[illegible]文武士の差は判ずるが[illegible]中の道樂なり

七より八へ八より九迄の間に無論聲の高低あり然れどもそを文字を以て示すも到底[illegible]

を[illegible]して大衆を是に示すりとなり

## ○春日野

春日野に下萠出る若草の。歳の戸明けて秋津州。霞渡れる片岡に月は殘れど雉子鳴く曉の友鶴君が代の壽祝ふ初聲に。南山の盛り久しき松竹の。落葉掻取る諸人の遊ぶ小川の菊の露。流れも匂ふ五百歳の齡を國にゆづる葉の。朝日輝く富士の峯是を。「蓬來山とは謠ひつゝ」。七寶の峯は影を湖水に浸し。木々の梢も荒磯の月海上に浮んでは』。兎も走る浪の上綠樹影沈んでは魚木に登る風情かな。

五風十雨の御代の春。四海も靡く時津風」。君が治むる御代なれば人として君が此代を幾萬世までも守り「行こそ芽出度けれ」。

## ○武藏野

諏訪兼利作

武藏野に草は。種々多けれど。摘菜にすれば扨も少し。皆人は若き時より只。一徒事に日を暮す。寸智藝能なき人は」。寶の山に入りながら空敷歸るが如くなり。偶々此世

に人間衆生と生れ來て。眞如の玉を磨かずば人と生れし甲斐もなし。人よりは淺く思はれて只犬の老ひたる如くにて朽果るこそ無念なり。又何時の代の何時の時にか磨くべし。頼まれぬ代にもあるかな月鼠。騒ぐ草葉の露の身なれども。例令高位長者の身となりて。七珍萬寶滿ち〳〵て榮華に驕る樂みも。一睡一夜の夢の如くなり」。歡樂極まりて哀情多しと古人の文にも記るさるる。去ればこそ。「中々代々生々の樂みも。心の中の月や花是を樂む人もなし。會者定理盛者必滅の代の習ひ。春去り秋は蟬の聲。刹も果敢なき浮世か

な。世の中を思へば夢か稲妻の。ちらとする間の語らひに。慳貪愚痴は迷ひなり。嗚呼引寄せて結べば草の庵にて「段落解れば原の野原なり」。すこしきを足れりとも知れ滿ぬれば。月も程なく十六夜の空や人の。「段落身の上と知られたり」。

註解　當武藏野も松離に同じ

## ○千代の春

斯る芽出度御代なれば。國々所々に至るまで。千代の春千歲の。「段落秋と樂しむも」「大メ皆これ君の惠み深き故ぞとて」。

# 千代の春

いよ〳〵君を抑ぎ奉る。思ひ〳〵の殿作り甍を並べ軒を連らね。高殿樓閣に構へつゝ朝日の光月の影。うつる光の輝くも。こともおろかに思はれて。庭には金銀の砂石をしき四方の圍みも夥し。不老門を出入る人の袖を連らねて色めくは。是ぞ名に負ふ華衣喜見城の。「都の春もかくやあらん」。箇程治る御代なれば雨風までも枝鳴さじと云へば又。人として君が此代を。千代萬代までと。「祈らぬ者こそなかりけり」。

註解　今千代の春は短歌にして一二の中間の切れ[illegible]

# 春の調

新玉の年の初の壽や昔し替らず吹揚る。笛と皷の音迄も春の。「調べに聞へつゝ」。「玉だれゆらく風立て」。舞の袂も長閑なる神の井垣の老松も枝を連らね。葉を重ね。うべも大夫の影高く壽を君にゆづる葉の常盤の色ぞ類ひなき。軒葉に咲ける梅が枝も和泉式部のゆかりとや床敷かほる窻の内。「文見る袖にうつりくる」。好文木の名に恥ぢず。又高砂住の江の。松に相生の尉と姥。妹背の契り末長く四方

の海原浪なぎて吹も靜けき時津風。枝も鳴らさぬ御代の春。千秋樂には民をなで萬歳樂には。「[illegible]命を延ぶる樂も」。年毎の今日汲替はす盃に。君と御國を祝ふなる。「[illegible]松囃こそ目出度けれ」。

註解 常磐の調は松囃に同し

似

俄

## ○似俄

熱々有爲天變の世を觀ずるに。花も紅葉も一盛り。況んや人も一盛り。人の齡が花に似て咲くは。「[illegible]遲して散り易し」。

散り行く花は根に返る。木さへあれば又來る春は枝に戻りて匂ひ來る。鳥も古巣に歸ると云へど夫れ人間は死して再び後に歸らん死出の山。古の如何なる人のふみしめて。行くも歸るも迷の深き涙川。親の別れに子を連れず又子の別れに親そわぬ。獨り生れて獨行こそ。只冥土の營みを疑ふ心あらずして常に唱へし念佛は。是が淨土の寶なり。去れば茲に一つの譬あり。似俄と云ふ虫がいるなれば。已が姿でなき虫を夫を我が巢に集めつゝ心盡して祈りせば我に似るこそあるぞかし。我等如き迷の深き衆生も箇程に

深く祈りなばなどかしるしのなかるらん。維心の淨土巳身の御陀と聞く時は。十萬億土の極樂もこゝを去ること遠からず皆人は此理を知らで罪を作るぞ果敢なかれ罪は來世の火の車。[illegible]善は淨土のはちすなり。偶々此代に人間衆生と生れ來て。後生前生を願はずば誰も。一段落淨土に浮ぶ瀬はなし。

## 似俄

註解　當似俄は松[illegible]間樣

# 物狂

風に柳。亂れ心や狂ふらん。胸のほむらが身を焦がす。恨めしの浮世かな。呼嗚恨めしの此代かな。「此里の人の心が善惡なくて」。谷の埋木朽々に搖立てられて君と我れ。別れ〳〵に鳴海潟。身の終りこそうたてけれ。思出れば今は早や我が古郷に住家なし。いざ去らばと。思ひ立田の戀紅葉。夜半の嵐に誘れて散り〳〵になる一葉の船も焦れ出で。水の面に浮き波繁き身にしあれば。或時は君を恨み又

或時は身を歎き心狂氣に成り衣。身に餘りたる涙川深き流れに身を沈め。浮ぶ甲斐なき。我が身一つを如何せん」。時知りて花も涙や注ぐらん。鳥も別れを惜みてぞ鳴く。命の輕き事は只。(飛花落葉の如くなり)。(君思ふ心は常に是れ高山其一念は五百生)。(懸念萬功。無量功に至る迄切又何の因果ぞや何れ思ば中々に)。浮世に在りしあり顔の。娑婆の勤も益はなし。然し浮身を捨て果んとは思へども。流石又輪廻の浪の立間にも。其面影が身に添ふて片輪車の風情にて。遣る方もなき胸の内」。今は路頭も憚らず。泣

きつ笑ひつ安からねば。物狂とや人の云ふなり實に。「[illegible]人目こそ恥かしけれ」。

註解 此物狂も松雖同様なれど吟替あり吟替はいづれの吟替も必ず三區に分ち初めの一區は中音にして中の一區は中音ありかん音譜あり中音にて止め置く終りの一區は初めは中音ありかん音譜あり地音より落して止め置くべし

○狂女

人間の世の形勢を。心に留めて按ずるに。一度は榮へ又一度は衰ふる事もあり水も流れて又其水上に。「[illegible]歸らざるが

如くなり。祇園精舎の鐘の聲。諸行無常をあらはして飛花落葉は面り。只徒らに過ぎる身は夢の中なる夢なれや。其古へは我ながら美人の姿人にも勝れ。餘寵の華と飾られて今を盛の華かづら。かけまくも忝くも我君の御側近くに召使はれて。月見華見の御遊の供。錦の褥玉の翠簾明暮なれし身なれ共。人一盛り華一時に移れば替る身の憂さを。其寵愛も枯々に今は憔悴と衰へて。只何事も妹背の契り淺衣の。薄き縁にしと成り果てて哀れ果敢なき我身かな。人生夫人の身となる事なかれ。五十年過ぎるは夢の中。僅百年が間

の樂も苦も他人によると。白樂天が書きたる詩も。「段落」今
身の上に知られたり」。哀れ只。（吟替）柴の廬に人なうして）。
（獨り涙に伏沈む耿々たる殘んの燈火幽かにして壁に添ひ）。
瀟湘たる。（夜の雨窻打音迄も恨をそふる媒となる恨の數の
重りて）。唐士迄の思ひ草。哀れ貴きも賤しきも物思ふ身は
異ならず。流れも同じ水なれど。「段落」淵瀬と代るが如なり」。
唯人間の因果を廻る小車の。我が惡業に引かれ來てかゝる。
「段落」浮身をや焦すらん」。

註解、當狂女は物狂に同

# 老蘇の森

數ならぬ。身にさへ年の積る哉。老は人をも嫌はざりけりと連ね置れし言の葉が。今身の上に知られたり。左れば此代に生れ來て。生老病死の四の苦を逃るゝ人とて更になし彼の叉四の苦の中に何れ差別はなけれども中にも老苦が哀れなり。思ひ遣るに古へは。容顏美麗の姿にて。月や花かと人にも見られ。假初の道行振りに花をも送られ。叉文玉章を取替はし。笠の端づれの隙よりも人を見初むる

# 老蘇の森

目元迄。嗚呼恥かしやなと思ひしこそが。「一段落」夢かと覺めて昔なり」。衰へる姿見る度に。（吟替）口惜しき事の增鏡。「涙に曇る哀さを。詩にも歌にも記さるる白髮重來一夢の中に」。（昨日迄。乘りて遊びし竹の駒今日は早老の坂行く杖と賴まん又は古歌にもよまれたり」。替り行く鏡の影を見る度に。老蘇の森の歎きをぞすると。連ねおかれし言の葉が。「段落」今身の上に知られたり」。只人間の此代にあるは。うたゝ寢の。「一段落」夢か現の間なり」。

註解 「老蘇、森、物狂、同

## ○花の香

梅は匂ふて櫻は花よ。そうしての後。人は情の下に住む。峰の小松も獨立とは申せども。夜半の。「嵐は遁れ難なや」。富士や淺間が嶽迚も。霧や霞にうづもれて。三千世界に光りを照す。日月さへも雲の閉しは如何せん。況してや人間は五尺に足らぬ身を以て。獨立して代を渡らんと。思ふ人こそ果敢なけれ。君は臣下を賴み。臣下は又君を賴み奉る。親子兄弟夫妻が中又は朋友の中迚も。互に賴み賴ま

れて妹背の中にて代を渡らんと思ふ人こそ。是れが誠の人なれや。我關白に過ぎる身は。風の前なる燈火にはあらねども。消るに易き身を以て惡を頼むは地獄なり。善を願ふぞ是れが極樂。地水火風は裟婆の假物釋迦も孔子も名のみ殘りて今はなし達摩尊者の無一物と解れしも。實に理なりと知られたり。左らば古。華に增したる美人の數を數ふれば。漢の李夫人唐の楊貴妃。我朝にては二條の后。和泉式部に小野小町。常盤御前と言れし人も。盛りの時は名も高けれど。死すれば野邊の土となる。其名も高雄の

紅葉野田の藤。吉野の櫻北野の梅も盛りの程は名も高けれど散りての。後は色も香もなし一。

註解　當花の香は松蝶同樣なり



## ○戀の山

龜山某作

昔の時に。誰が蹈み初めし戀の山、滋き小笹の露分けて今日もや。一段袖を濡らすらん一。「かかる暗路は荒磯の濱の一。砂石の數はものかはと傳へ聞く陽明帝は二八の春の花の頃。心盡しは遠山の未だ見ぬ花にあこがれて。勿体なくも王宮

を忍び出させ給ひける。野飼の牛に吹く笛の音をのみ聞て泣き給ふ。光る源氏は輝もせで。曇も晴ぬ春の夜の。朦朧月夜に名を立て。身は憂き須磨のさすらひに調ぶる琴の音に通ふ。松の嵐をかたしきて。結はん夢の終夜。袖こそ浪に浮き沈む。扨も短き玉の緒の絶て其名は内親王の。御墓の石に這ひ纏ふ。ていかかつらの其の執心も。尚も殘りて在原の戀せしと御手洗川にせしみそぎ。百夜通ふて一夜だに。逢ねば遂に深草の。露と消にし人もあり。霞を食ひ氣を呑で。飛行自在を身に得れる。一角久米の仙人も

亂れ心や九十九髮。身は浮空に鳴神も雲の絶間に落さかや。況してや凡夫に於てをや。高麗唐土の戀衣楚の驪山宮が私語ことを誰が聞き傳へ今の代迄も殘すらん。戀は果なき武藏野の。草のゆかりも懷しやと思ひ廻せば小車の。我惡業に引かれ來て斯かる。「一段落 浮身をや焦すらん」。中々に思初めずば紫野。戀も。「一段落 うすきも物や思ふらん」。

註解 高戀の山は松[illegible]に同じ

# 鴛の夢

我戀は鴛の夢かや見ては只。語らで暮す因果なり。思に餘る折節は門に立出月をも詠め花を。見てこそ慰まむ。其間なりとも忘れつゝ。涙の雨も晴れやせん斯る歎きの状態を何に譬ん片糸の。逢はん契も徒らに。なにしに深く願ふらん。有りし昔の我戀は。似たるもあるや古歌にある。露も實に逢はでや果てん片糸の。よるよる毎に思ひのみすると連ね置かれし言の葉が。今身の上に知られたり。左れ

ば津の國の浪花が浦。生田川には戀故に身を捨て果てし人もあり。又は聞くにも。柏木の衛門の介は女三の宮、戀奉る。遂に其戀遂げ給はねば富士の高根と我胸は。煙競べにあこがれて。遂に戀死に召されける。尚も譬へばこゝに又武藏の國の住人熊谷次郎直實は。詮方なくも。無官の太夫敦盛を手に掛け。夫れが一期の思ひとなりて。鎧の袖を墨に染め新黒谷に引籠り。三年が程は終夜。百萬遍を唱へ敦盛の追善を營みける。之れも敦盛最期の時一言の言葉の交はしある故に。武士の情もあるぞかし。譬へても譬

方なき我胸は。あらはに燃へるものならば。何と駿河の富士の山。一段落 淺間が嶽とは言はれまし」。花もあだなる。「朝顔の露の間なりと逢ふものならば。夫れで。一段落 思も晴れて行く」。

註解　當おこしの夢は松雌同様

○灘廻

頃は彌生の末つかた。君の行衛を尋ねんと。阿こんが濱より船に乘り。漕ぎ出見れば南林寺の。一段落 松の葉色は常盤色」。

## 灘廻

「濱に鹽焚く夕煙り」。煙は空に行消へて消へて跡なき果敢なさや。洲崎に寄する白浪は沖に浪打櫻島。腰地に伊達の雲の帶。咲亂れたる花衣。着て見ぬ人の心なや。北は祇園の御社。玉龍山の鐘の聲無明の夢をや醒ますらん吉野の里の遲櫻。谷の戸出る鶯の初音床しき時鳥。浪間に見へし沖小島や。友呼ぶ千鳥數見へて彼方に高き御山をば愛宕山とは是れとかや。筑波の神は御在ねど。なべの數燒田の浦や。大磯小磯打過ぎて玆は險阻な茅落し。御船の明神伏拜み。暫々爰に浮かり船。裏咲く風に帆を揚げて。「殿君に大

# 灘廻

崎龍が水。心岳寺をも伏拜み。此處は脇元別府川や。加治木の里を詠むれば。音に名高き邪王嶽。嵐に花の數散りて流れて出づる黑川や。七里小濱や長濱の。眞砂の數は盡きるとも思ひは盡きせぬ何時迄も彌陀の淨土は八幡の宮居も玆に立せ給ひ。常燈の光を輝し給ひける。捨て置れぬ濱の市。沖に小島の辨財天梢に傳ふ猿の聲。猶も小村の海士火は。宛然夏のほたる原。ろ聲の音に驚て沖の鷗も立騷ぐ。尚も小村の海士人は。苫を敷根の夢見谷。音信れもせぬ船の中。遠寺の鐘のつくごとに。誘ふ嵐に早福山の。

一段落宮が浦にぞ着きにける」。

註解 高瀬越之松壁に同じ

## ○甲斐殿道行

寐られぬ儘に思ひ立ち。出るぞ名殘三日月の。廻り逢ぬも定めなしとは思へ共。又何時の世の何の時にか。君が面影を見るよしも。ありなんとまた。一段落東雲に立出る」。「大か頃しも春の朝朗け」。垣根に言問ふ鶯の鳴音に花や咲きぬらん。去迚も。花は春あらば又も昔に成ぬべし。二八の秋の

# 甲斐殿道行

紅葉こそ。惜むに甲斐はなかりけりと。思ひ准らへ行程に浮世を廻る車町。緑の末は糸長き。柳の町をも打過ぎて。行けば程なく。戸柱の橋の上より見渡せば。出入る船も我か如く。焦れて物や思ふらん。甲斐なき戀は諏訪の山。前は稲荷の後迫。愛宕山をも妻手に見て。我が身の上は生殺し。譬へ行こそ果敢なけれ。命あらば又來ぬ春さ行程に。立寄る影もなど更に。今はなき世に業平の。「名計り殘る涼松」。よしや吉野の華盛り。君故見るぞ果敢なけれ。實にや宮捨人も。華にはなりか陰家の。さづきは未來菖蒲谷。

# 甲斐殿道行

東を遙に詠むれば。名にも似ん鐘の聲。なき寺山は戀する人の住家にて。遠路の里に立煙り。是こそ春の霞かな。木陰れに行道なれば。人目の關や忍びつゝ。心細くも通山。暫し迚。人や立寄る柴の本是より先は下り坂。逢ふ坂などゝ名をいはゞ。誰蹈初めし首途共。思ひ准らへ行程に。名は白金の小石原。眞砂の數は盡る共。思は盡せぬ何迄も。彼の明神伏拜み。（南無や明神願くは。空吹風の音信に。聞き及びにし與市樣を。（露の命の消果ぬ間に。廻り。逢せ給へかしと深く祈願を申つゝ見卸し見れば春霞。棚引雲

の絶間より。遠山の櫻仄かに見へて。深山木の其梢とは知らざりし。櫻は華に顯れにけりと。有し歌にも記さるゝ。頃しも春の朝朗と打詠め。脇元の宿を過行けば絶ず流るゝ思川。鶉鳴くなる餅田原。行に果なき十日町。左の方は南無藥師流れの水も潔し。折節滿潮成れば竿指渡す海士小船身は諸共に焦れて思ふ心の底深し。實にや忍ふに同し。心の人もなければ。行末も知れぬ有樣を誰にか斯と岩の原。何時かは君を松原の、苔の細路踏分て思ふ。加治木にぞ着にけり。早や珍宗寺の鐘の聲。君が有家や告ぬらん。「[illegible]

# 甲斐殿道行

人の別れや急ぐらん。君が有家は常盤にて。今三洲の萩原と尋行く。門の邊に彳て與市樣々よと問けれど。左しも思ひし甲斐もなし。折節他行成しかば。力なくして立歸らんとは思へ共。此處迄來る印迚門の扉に書計。其文に曰聞しより。遠路を忍び此所迄往來すと云へど。不緣第一にして逢ふ事を得ず。空敷歸る道すがら。君に於ては恨みなし。我浮世の若きたるが故淋敷夕を送りしが。又何時の時をか期さんかと。書置て。擲節を與市樣にはね折懸て。稚兒故に今朝の出船に乘り遲れ。人ころ知らぬ陸を行くかなさ。

歌ひ歸りし形様を。「一段落」見るにも最とゞあぢきなや」。心から心に物思はせて。「一段落」身を苦むる我身かな」。

註解　當ヶ斐殿道行は切り二ヶ所にして吟替及和歌あり前後はいづれも松雌に同じ

## ○那須野

四國矢島の荒磯の濱で。源氏平家の戰に。源氏方弓矢の譽「一段落」今が世迄も殘るゝ」。「大かん」左もあれば平家方より沖なる船に」。扇を的に立てければ義經公御覧候へて數多の方を御前に召され。如何に方々あれを見よ平家方より沖なる船に扇

## 那須野

を的に立てけるが。兎にも角にも。彼の的射らでは叶ふまじと宣へど。沖に立ちたる的なれば。誰こそ御請致す者もなし爰に下野の國の住人。那須の與市宗高は。青年爰に十九歳其比名を得たる弓取なれば心能く進出で御致し御前遙に引さがり。左れば宗高其日の出立は何時に優れて華やかに。緋威の鎧着て。白檀磨の脛當に。兵庫鎖の小手を貫き鍬形打たる五枚甲の緒を占め。小金造りの太刀をはき年は五才の眞黑名馬。梨地の鞍を置き。轡明鎮。紫手綱重藤の弓に。霧降の矢を持つて。波打涯に駈出で。沖なる的を

見渡せば。間十二町計りと打見へて。名殘りの波は音高く。的は定らず誠に。一（落段）射るに射られぬ次第なり一。左れど又。武士の一度御請致した上からは。兎にも角にも。彼の的射らでは叶ふまじと。小松原へぞ駈揚り。駒より。飛降り兜を脱て。那須王八幡伏拜み。宗高祈願に。若しも某。（吟詰）七十五迄の命ならば）。（六十五迄六十五迄の命ならば。五十五迄五十五迄の命ならば）（四十にして身命を縮め。何卒彼の的射らせ給へかしと深く祈願を申宛。頓て那須王八幡聞召し）。宗高が二共なき露の命に引替へて。祈る心の不憫とて。

# 那須野



十二方を的一筋に打守られて。難有やな。宗高は。すぐに駒引寄せ打乗小松原を駈降り。駒の手綱を操て海中へ颯つと馳入り浮つ沈みつ一段計りは出でたりしが。駒逸物とは申せ共逆捲浪に怠れつつ泳ぎ兼てぞ見にける。斯ては叶ふべからずと弓に矢を打違ひ。矢聲を懸けて放ちければ。其矢五丁計も進みしが矢聲弱く。迚三度の勝鯨波。噇と揚ければ。願の功力の御威光かな。夫より矢も進み金目際よりふつと射切り。扇は空中へ舞上る。平家敗軍源氏捷軍に定まりて源氏方三度の勝鯨波噇と揚ければ。痛はしや平家

方は。皆思ひ〳〵に西國指て落て行く。「段落」心の中こそ不憫なれ」。宗高は外に功名は數多あれど。斯程の功名は始めにて。名を末代に殘し置く。夫より。「段落」源氏の御代こそ目出度けれ」

註解　當那須野は物狂同樣なれど崩あり崩は歌其ものに依り長短はあれどいづれの崩も最初の謡出しは地音にして次ぎの區より中音及大かんの節に謡ひ又かん音及中音より地に落し終りは必ず大かんにて止め置くなり

## 〇錦の御旗

坂正臣作

天照す。日の影うつる。眞名井の流れ末淸く。瑞穗の國は

## 錦の御旗



昔より。武勇。忠義の人多し。「元弘年中の事かとよ」。御醍醐帝の三の皇子大塔宮と申せしは智勇備はれる君にして出家の身にてましませど。父の御爲め。國の爲め。逆賊を討平げんとの御企早く。賊へ洩れしかば。比叡の奥にも南都にも身を置給ふ事難く。熊野を差て落給ふ。股肱の臣は誰々ぞ。赤松律師光林房。木寺の相模三河房。片岡八郎武藏坊。平賀の三郎矢田彥七。村上義光。の九人にて。柿の衣に笈を負ひ。頭巾眉深く被りて。先達つくりて山伏の熊野詣に裝ひたり。龍樓鳳闕に人となり。輕軒香車を出

# 錦の御旗

まさぬ。雲上人の御步行の。長途いかにと御供の人々危く思ひしに。社〳〵の御祈り。宿り〳〵の御勤め。露も怠り給ねば。勤修をつめる山伏も見咎むる者更になし。由良の湊を見渡せば（一中かゝり）沖漕ぐ船の楫をたへ。浦の濱。木綿幾重とも。知らぬ浪路に鳴千鳥。紀路の遠山渺々と。薄紫の藤代の。松にかゝれる磯の浪。和歌吹上の浦かけて。月に磨ける玉津島。（吟替）光をよそに伏拜み。長汀曲浦の旅の路。心を碎く習ひなり雨を含める孤村の樹。（夕を送る遠寺の鍾。哀を催す黄昏に切目の王子に着給ひ叢祠に袖を片敷き

て」。朝家の榮へを祈ります。斯て十津河の戸野兵衞竹原八郎たよりて暫し居給へど。爰にも長く有かねて。高野の方へぞ落給ふ。茲に妹加瀬庄司とて賊に一味の士の。宮をさゝへて申す樣。此道通し申なば鎌倉よりぞ罪せられん。さは云へ。宮に弓引く事はいかにも畏れ多ければ。錦の御旗賜るか左なくば一人の御供止めて證據にせんと云ひけれど。股肱の臣を一人だに。いかでか殘し給ふべき。詮方なくも。御旗をば彼に與へて虎の口。「落段僅に遁れ給ひけり」。斯る所に村上彦四郎義光は。草鞋の緒や切れにけん。遙に後れた

りしかば。頓て宮に追付申さんと足疾過ぐる折しもあれ。ハタト庄司に行逢へり。家人が持てる旗見れば正しく錦の御旗なり。不思儀に思ひ尋ぬるに。事云々と答けるを。村上之を聞きも敢へず。くわつと怒りて打睨み。こはそも如何に何事ぞ。忝くも畏くも四海の主人に御座す御天子の御子。朝敵を追罰あらん其爲に。御門出の道なるに汝等如き下郎輩かゝる振舞すべきかと。持たる御旗を奪ひ取り大の男を搖攫んで四五丈計り投げたるはあたかも獅子の荒るに異ならず此怪力に恐れけん。妹加瀬庄司一言も半

# 錦の御旗

句も無くてすくみけり。義光は御旗を肩に懸け。程なく宮に追付。御前にひれ伏事の由を具に申上しかば。宮は斜めに御喜び古の北宮黝が勇氣にも立ち増れりと。めでましぬ。義光は勇のみならず吉野の奥の戰に宮に變りて打死す。御旗に打たる月と日と光爭ふ忠臣。義士とたゝへて後の世も—。君に仕ふる人臣の。鏡とこそは仰がるれ。鏡とこそは仰がるれ—。

註解　宮錦の御旗は那須野に同じ

# 元寇

聖人位に在る時はきりん其國に出るとかや明王政をなし給へば英雄執權の職に當る鎌倉山の松の風。一浪の音かと疑はれ」。龜山院の秋の月。何をおぼろにかすむらん西天遙か見渡せば我にあだなすあだの舟群がり集ふ誰や彼蒙古の王忽必烈は祖宗鐵木心の遺訓に基き世界統一の大業を其一代に遂げんとて慳貪邪慾飽く事なく。天魔破句の狂威をふるひウラルの東ぼつ海の北領土ならざる土地もなく

# 元寇

藩屬せざる國もなし四百余洲を平らげて宗の天下を奪ひしより貢するもの一千余國草も木も靡き從ふ其が中に獨り東海の日本國貢を入れぬのみならず執權北條相摸太郎。「大か命に應せず使を斬り」。首を軍門に切り掛けて六十余洲に號令し防禦おさ／＼怠りなし忽必烈しんいのほむらをもやしいざや日本を攻めつぶし蒙古の領土となさんとて大軍しば／＼進來す文永の春弘安の秋民の心は安すからず市に米賣る商買なく里にうゑ呼ぶきゆう民あり續ひて起る國難は朕が不德と身を攻めて位を讓らせ給ひつる龜山上皇聞召しい

さゞしんきんをなやめさせ給ふ去れば王城の地いと危し御座を關東へ移させ給へと申し上るもゆるさせ給はず朕不徳の故を以て此國難は起りつれ民のとたんを跡に見て爭かでか朕の已まぬかるべき王位は今上のしろしめす政事は鎌倉に執權ありありて甲斐なき此身なり甲斐なき此身打捨てゝ。捨る甲斐ある事ならば）。（露玉の緒のおしからじさらばと斗御手つから御筆を染めさせ給ひ）。（神風や伊勢のみをやの大神に我命めさせ給ひて此國難救はせ給へと深く御祈願こめさせ給ふ。人には夫れと岩清水ひとり御行き夕まぐ

れ鳳王のさばりを出でさせ給へば御側に侍べる人々は龍の御袖を押へつゝいともかしこき玉体を輕ろしめ給ふは何事ぞ思し止めさせ給へと申し上るをいまし等の知れる處にあらずとて永き夜の一夜をこめし御參籠大御心ぞ難有けれ上にかゝる仁天の君あり下義地の臣なからずや。「執權時宗の號令に」千馬萬軍猛者勇者目に余りたる大軍をおめず怖せず防戰す比は弘安四年閏七月一日上皇御祈念滿願のあかたき西九州の空。「はるか一天にわかにかき曇り大地山河鳴動し一陣くるう大むらし神軍天馬にむちうちて魔王

の城を攻むるが如く浪はいかつて高島の沖に四千の蒙古の船塵か芥か浪の上群り集ふ十萬のあだの命は大和田の底のもくづとなりにけり」。執權時宗の果斷勇決鎮西將士の忠勇無双この大勝を招ぎしは云ふも愚かの事なれど之れ一重に龜山上皇の内因讎を忘れ外大敵に當らせ給ひ身をも捨てんの御宣命至誠天地を感動し祖宗のめいご神風となりて蒙古を吹き拂ひ。拂ひ清め給ひしなれ」。六百年の春秋をかれずしぼまず今の代に昔忍ぶの語り草。語り傳へて繁るらん」。

註解　當元寇に那須野間諜あり

# ○吹雪の敵

力山を抜き氣世を蓋ふは我が北門の鎮めなる。「後備」歩兵第五の聯隊なり。「大かん卍巴と降りしきる」。雪を馬前の塵と見て拂ひつ進む二百余騎明治卅余り五歳の初月末の東雲に鋒と立たる霜柱馬のひづめにけたてつゝ向ふはいづこ雪の城田代を差してぞ進みける後れ先たつ世の人は幸か不幸か幸畑をすぎてぞ來つる田茂木野を眞白に染めて大峠小峠卸し吹

きまくる吹雪の音は武士の取し弓絃の音の如く射出す白羽の雪の矢よ。『射拔がば射拔げ我が腕を』。氷の劔霜の鎗突き貫かば貫ぎて見よ忠勇義烈の此腹を如何なるかんくも大君の御爲めと共に國の爲め。進め〳〵と下知するなる劔光雪に輝きて威風するどき勇將の下には貔卒あるべきぞうづまき返す雪の足けるや吹雪の音すごくあられのつぶて雪の玉弓手に拂ひ妻手に受けいざみ戰ふその內に寒風骨や切りにけん凍傷破れて血ほとばしる血汐に雪も色を變へひるむもようも暫しにて尙操り出す雪の軍幾重ともなく取り

# 吹雪の敵

圍み白黑も分かずなりにけり」。猛虎におくれぬ將卒も遂にやすろう火打山もさぬ妻木もぬれ果てゝ雪の露營に夜をふかしかり寢の夢も結び兼ね明け行く空は尚白く積れる雪にとざされつ。『中々あの木の森も長森も近しと聞けど乘る駒は倒れ〳〵て進み兼無念やる方泣く〳〵も再び茲に日は暮れぬ起き出見ればあなあはれのぶかに立ちし矢の如く髮は千筋にこほりつゝ眼を開き齒をかみて敢なくなりし兵もあり

國の爲め雪と戰ひ倒れても

# 吹雪の

勳は高し陸奥の空

弓矢八幡神かけて今日を限りの武運をも守らせ給へ我々は最後の隊伍整へて亂れぬ列つを世にとゞめ「魔軍の圍打破り」。倒れて後に止まんのみ來れと叫ぶ隊長は滿身總て膽ならんかゝる時にも我が軍規亂れはせねど自つから後れし兵は忽ちになだれの下に埋められ進みし兵はがけに落ちあとにつき添ふ下士卒が賴み切たる隊長もぐれんの氷にとぢられて。（呼吸さへ通はずなりければ）。（親に離れしひな鳥の尾羽打かれし心地せりはらわたこうりて死するとも）。

（我が隊長は捨てがたくまとへる毛布拔ぎ取りて骸に掛けし下士卒が心の内こそけなげなれ）。あわれ今わの際迄も身は忘れても忘れざる忠義の道の一筋に思ふ心の深ければ雪千丈も尚淺く八甲田山も尚低くし

風是如刀雪如矢　孤軍欲破苦寒圍
銀城一夜將星落　二百幽魂呼不歸

嗚呼陸奥の第五聯隊雪の魔軍と戰ひて彼れが包圍におちぬれど立てし勳は敷島の。「大和心の花ならん」。あやにかしこき大君は御衣の袖をしぼらせて慰問の臣を遣はされ大丈

夫なれや國民のたけき鏡とめでましぬたけき。「一段善鏡とめでましぬ」。

註解　富吹雪の敵は大體那須野同様なれど和歌及詩吟あり

## ○兒島高德

元弘二年如月の。小雨しく〳〵笠置山。白黒も分ぬ夜の風に。さして行手は楠の蔭だに見へぬ。とこ闇に荒れわたりたる人面の。「一段」心は鬼か蛇の如き」。「大かゝり」妖怪變化の賊共は」。恐多くも天皇の。龍駕を西の海浪路遥かに移したり。其有

# 兒島高德

樣は今も尙。史上に見るだに身の毛立。腸さへも寸々に絕入る斗り。うるむ目に古へ恨む外ぞなし。其時兒島高德は衆を集めて言へる樣。仁をなす爲め身を殺し。義を見て成すは勇なりと勵す言葉勵む武士。共々向ふ舟坂の。山の險阻は之れやこれ。天の與へし要害と身を潜めつゝ堅唾呑み。我天皇を奪奉らんと待に甲斐なき鳳輦は。早や山蔭に向ひぬと聞より早く。杉坂の樹の根岩角踏碎き。望めば又も鳳輦は。遙かに過ぎて後影。僅かに拜む斗りなり。今ぞ挫けし兵士の。跡見送りて高德は。天を睨んで地に

哭し。姿を變へて身をやつし雨の晨も風の夜も厭はず御跡慕ひつゝ。（善き折あらば赤心を。我天皇に聞え上げ。叡慮を安め奉らんと氣の張る弓は撓まぬも）。守り嚴しき板庇し。隙さゑ洩さぬ御姿に。差足拔ぎし日本刀。櫻の老木かき削り。墨斗の墨の黑々と赤き心を書下す。

天莫レ空ニ勾踐一 時非レ無ニ范蠡一

十字の文字は長城の。堅き固めや勤王の。しるすも賊は明めくら。群り見るも明鴉。阿房々々と笑ふのみ。我天皇は。龍顏最麗しく。暫の間。愁の御眉開かせ給ふぞ難有や。斯

の如くに高徳が虎の穴だに恐なく。〔中〕虎の子得んと思ひてし〔三〕。勳は後の世々迄も輝き渡りて曇なき。明治の御代に愛國の。古きを尋ね新しく護りの神とぞ崇らる。去れば代の人々心せよ彼も人なり吾も人。食ふは今も古も。日本に實る瑞穗なり。飲は昔も今日も。〔一段落〕清き日本の國の水〔二〕。鄙屈の腸洗ひ去り。國を枕に誠忠の。〔一段落〕樂き夢や結ぶべし。

註解　當兒島高徳は物狂同樣なれど詩作あり

## ○臺灣入

西村天囚作

皇の。稜威は四方に輝きて。清國遂に和議を乞ひ。臺灣島を献上し合戰爰に治まれる君が。御代こそ目出度けれ」。「臺灣島の土賊共。」龍車に向ふ蟷螂の斧をふるふと聞へしかば征討の師をぞ遣はさる近衛兵の精鋭を率ゐて。御渡海召されしは陸軍中將大勳位北白川の宮とて金枝玉葉の御身なり。三紹角の御上陸。幕營ありし其跡に木を削りてぞ記さるる。炎熱やくが如き日に。「三紹大嶺の險阻をば馬にも召さず越へ給ひ」。大雨頻りに降る時も濡にぞぬれて進まるゝ。士卒之れに感激し病兵。さへも立上り。命

を惜まず進軍す。所々の砦に籠りたる。賊兵共の射出す彈丸は。雨かあられか白雪の降り注ぐが如くにて砲煙暗く天を蔽ひ百雷均しく墜るに似たり。宮は矢石を侵しつゝ突貫せよと下知あれば。川村少將兒島大佐を初めとし勇み起たる近衞兵我先きにと奮進し賊の本營に突て入る。賊兵之れに氣を呑まれ右往左往に遁散りて降參するもの數知れず。大砲小銃の戰利品山を築ん計にて勝鯨波噇と揚ければ宮は此時ゆう〳〵として基隆城へ入らせ給ふ。斯て六月十日には臺北城を陷入れ。七月新竹を占領し。明くる八月には彰

化臺灣兩府を定め。十月の初方。臺南指してぞ進まるゝ。天厚して瘴癘多く。地險峻して糧道絕へ。千辛萬苦の其中に。宮は士卒と食を頒ち。晝は汗馬に鞭をあて夜は荒野に露營して。衣服の袖に月を宿し只だ君の爲め國の爲め平定の策を撓し給ふ。嗚呼痛しや悲しやな。竹の園生の御身にて。餘り艱苦を積ませられ遂に御病に罹らせ給ふ。日々に重らせ給ふに依り。御供の人々打驚き都に歸らせ賜ふ樣頻りに御諫め申せども。宮はいつかな聞し召さず。我官軍の將として賊徒平定を見ぬ中は。例ひ臺

灣の土となれば迚。我のみ士卒を打捨てゝ爭かでか都に歸らんと籠に召されて進まるゝ。御臨終の其際に。賊徒平定と聞し召し。宮はにつこうち笑みて。萬歳と只一聲叫び給ひし計りにて敢なく天に昇らせ給ふ。傳へ聞く日本武の古事を今目の前に見參らせて。國中の民も兵も慟哭せぬはなかりける。左は去りながら。昨日今日とは思はねど。老少不定に貴賤なし。只人は名こそ惜しけれ皆人は名を千歳に殘せかし。

## 臺灣入

臺北攸々仁政成、　皇軍到ル處沸二歡聲一、

旭光將レ蒙ニ臺南地ト、彼戮レ巨魁ン安ニ萬生ヲ一ス
と宮の謠ひ玉ひし如く。盛功偉烈後の代に。「落」輝き渡りて曇りなく」。北白川の水は逝きて歸らねど。月影永く澄み渡り。光は代々に流るらん光は。「一段落」代々に流るらん」。

註　宮樣御人は吹雪の歌同樣なれど和歌なし

## ○石童丸

筑紫の大司名も高き加藤左衛門重氏は無常を感じ代を捨て。「段落」諸國修行に出給ふ」。「大ハ」殘されたりし妻や子は思ひ待

# 石童丸

づ事十余年」。父上高野に在ると聞き石童丸は母上とすげのおがさを傾けて旅の勞も厭ひなく漸く高野のかむろ宿明日は逢はんと悦ぶも女人禁制の山なれば是非なく石童只一人母を麓に殘しおき杖を頼りにたど〳〵と心細道ふみ分けて峯の薬師や不動尊手を合せつゝ伏し拜み其夜は其處にかり寢して傘のびようぶにうで枕。「中略」 諸行無常と告げ渡る鐘の音いとゞ身しにみて」。九百九十の寺々や峯谷々の阿彌陀佛ぼさつを念じ尋ぬれど父ぞと思ふ人はなし三日二夜は早すぎて麓の母を案ずれば後ろに引かるゝ心地して無明の橋

に差し掛る左に花を右にじゆず光明眞言唱へつゝかるかや道心下り坂見上げ見下し顔と顔石童丸の振り袖と高祖の袖ともつれ合其時袖にとりすがり此御山に。今道心教へてたべと乞ふ姿。見れば一人りの幼な子が腰に差したる脇差も見覺へのある顔せよ扨は不思議と思へともさあらん体にもてなして尋ぬる人の名を書きて札場に立つれば逢ふ事もあらんと聞て石童丸は泣き沈むかるかや哀れに思ひ手をとりて。已が住家に列れ歸り。國は何國で名は何と問はせ給へば涙ぐみ國は筑前松浦の加藤左衞門重氏が忘れ形見

# 石童丸

の石童と聞てかゝるかや胸せまりせき來る涙とめ敢へす石童夫れぞと悟りければ若〳〵父上にてもましまさば名乘り給へと泣き沈む嗚呼なづかしや我が子よと云はんとせしが名乘り兼其かるかやは。去年の秋空敷なりしとのたまへば。石童丸は又もワット泣きせめて墓場を敎へてと乞はれてかるかや是非もなく手をとり墓に列れ行き指さしてこれこそ父の墓なりと聞て石童丸は泣き倒れ前後も知らず歎く樣後ろにたゝずむかるかやは。胸もはりさく斗なり。暫くありてやう〳〵と石童丸をだき起し涙は佛の爲ならず一度下

りて母上に此由告げて廻向せよとさとされければ石童丸はなく／＼山を下りつゝ母上に此由告げんと來て見れば哀れや母上は石童丸を待ち兼ねてふもとの野邊に枯れ殘る草葉の露と消へ給ふ。

（吟替）嗚呼父上に生別れ。又母上には死別れ天にも地にも便なく跡に便りは姉一人。逢ふて此由語らんと歸りて見れば姉も又此世を去りて影もなし最は尋ぬる人もなく／＼。高野に登りし其時にあはれみ給ひし御僧より外に便りは泣く斗り又も高野にかるかやの庵尋ねて御弟子にと乞はれてかるかや是非もなく共に打ち列れ國々を修

行なしつゝ信濃なる國に住家を定めさせ師弟は名乘る斗りにて親子地藏と唱へよと。一段落 遺言し給ふぞ哀れなり。信濃に名高き善光寺石童寺の本尊に親子地藏のいますなり親子の緣はかく迄も切りても盡きぬなりと今は昔の物語り。一段落

南無や大悲の地藏尊

註解　當石童丸は切り二ヶ所あり他は物狂等の詞

〇赤星（初段）

國を申せば肥後の國在所記るせば割府と云へる扨も在所に

# 赤星

赤星源次綱明とて。一段落 弓取一人おはします。しかも其頃肥前方に味方召されける。其歳の年號申せば天正九年辛巳頃は卯月七日と申すに肥前方龍造寺山城の守隆信方より使者の參りて申す樣如何に申さん赤星殿誠に肥前に味方召されるものならば人質賜はれ赤星殿と御意下る赤星承り扨は中々國主の御意とは申せども誰をか質に參らせん使者の詞に歳は十四に成らせ給ふ松若殿とて若のある由。肥前屋形に隱れなし彼の若質にゝと御意下る赤星承り扨は中々若は一人候へど彼の若質に出しては後の歎きは如何せん

去れど又國主の御意には叶ふましと若を召寄せ御尋ねあれば若の詞に某國にありながら。「大か二人の親の御奉公國の爲めとなるならば。」今日唐土迄も參るべし質に渡らん事は御心安く思召されとて頓て十八人の士を御供に召列れ給ひ肥前に御渡なされ佐賀の御内に伺候あるこそ哀れなりいまだ三日もすぎざるに重ねて使者の參りて申す樣如何に申さん赤星殿歳は八ツに成らせ給ふ安千代殿とて姫のある由肥前屋形にかくれなし彼の姫質に渡し給はれ左もあらば兄の松若は國へ歸すとの御掟なり赤星承り扨は中々姫も一人候

へご若を質に出してさへ幼少の姫迄も質に出しては母が歎きは如何せん去れど又國主の御意には叶ふまじと姫を召寄せ御尋ねあれば姫の詞に某國にありながら。「中か二人の親の御奉公兄の替り國の爲となるならば」京鎌倉迄も登るべし況んや肥後と肥前は近き間と承る質に渡らん事は御心安く思し召されとて頓て士二人女中六人を御供に召列れ給ひ肥前に御渡なされ佐賀の御内に兄弟ともに伺候あるこそ。「段落何より物の哀なり」。「大か是は扨置き茲に又」。肥前に於て強顔士隈部左馬の介親興と申せしは赤星殿と界の論を召

されしが赤星殿より三百余町をふみ取られ兼ねて此事を意恨に思はれて如何にもして赤星に腹切らせんと思ふ折節の事なれば之れぞよき折と心得て直ぐに隆信殿へ作り文を上げにける隆信此文を御覧なされ。「以の外に腹を立て扨は中々赤星は兄弟の子供を質に取られ無念さに薩摩に味方肥前に二張の弓を引くとかや其儀ならば彼の兄第は此處へ置きても如何せん又國へ歸しても如何せん肥前に於て法ある法度の死罪生張付よと御意下る」。痛はしや兄弟は肥前屋形に三日も置かずして肥後と肥前筑後の境南の關竹の世原に

送りあるこそ哀れなり松若詞に如何に申さん隆信様某兄弟を御殺しあるならば肥前屋形にて只一太刀に殺し給へさあらばと一士が苗字の恥辱家の恥へりがき越へて隠れ忍びは致すまし夫れ武士は。畳の上に育ち野原に死すを本意とは申せども」。某兄弟は夢にも知らん野原にて長く浮名の立つと思へは嗚呼之れが一つのいかゞなり斯くは云ひつゝ某は男の身にて苦しからず幼少の安千代は國へ御歸し給はれと日には七度のわびをなす姫の詞に如何に申さん隆信様某は女の身にて苦しからず兄の松若は赤星が家の世つぎの

事なれば國に御歸し給はれと日には三度のわびをなす隆信御掟に如何に兄弟科なき隆信を恨み給ふな謀反心の。父の赤星を恨めとのたまへば。姫の詞に如何に科なき隆信樣を恨み申さん況してや父の赤星をも恨み申さん恨のあるは中より作り文を上げにし隈部殿こそ今生後生の恨みなり松若詞に如何に安千代何某の子孫と云つて女にこそは生れけり人を恨みては如何せん死出の山三途の大川左京が橋迄も諸共にと悦び給ふぞ哀なり去れば松若其日の出立は何時に勝れて花やかに先づ肌よりは白地練絹紫染に金糸の小袴

シツカト召され頓て十八人の士を御側に召され。『如何に方々鳴をしづめて聞き給へ』。某兄弟は身に覺へなき科に上意をのたもふなり迚も上意は逃るまじ御身達は暇取らする何國の里にも落ち行きて我にましたる强き主人を賴めとのたまへば十八人の士は皆頭を地につけ詞を揃へ嗚呼情なき若君樣の仰かな士が强き時は主人と賴み今弱きとて君をふり捨てゝは如何せん兎にも角にも君諸共にと申し上れば松若殿は斜に悦び頓て十八人の士へお盃をぞ賜はりける姫の其日の出立はいつに勝れて花やかに其頃肥後に流行りし

十二小袖を召されしがたけと一夜の黒髪は月の輪形によせ給ひ頓て六人の女中を御側に召され。『如何に方々鳴をしづめて聞き給へ』。某兄弟は身に覺なき科に上意をのたまふなり迚も上意は逃るまじ御身達は千に一ツも隆信様より御暇賜はるものならば割府の在所に落ち行きて二人の親の御前に參り某兄弟斯く成り果たる有様を一事も洩さず皆申上げよとのたまへば六人の女中は皆頭を地につけ涙を流し誰こそ御返事申す者もなし頓て松若殿は撿使を御側に召され如何にはたの板は西へ向けると申せども某兄弟は肥後

の方へ向けて賜はれ左もあらば隈府の在所へ二人の親のあると思へば嗚呼吹き來る風迄なつかしや撿使如何にとありければ痛しや兄弟も運や盡きるらん其の日の撿使隈部殿にてありければ如何に兄弟。『大かはたゞの板は往古より傳はれる儀式なれば』東へ向けては天道に恐れあり御身達兄弟迚ても西へ々々とありければ痛しや兄弟は最は力に及ばずと割府の方を三度招ぎてはたの板へぞ召れける三日が間小歌拍子にて夜をも晝をも暮し給ふ痛しや姫君未だ幼少の事なれば三日に當る扨も西の上刻。（吟替）竹の代原の朝の露と消へ

給ふ)。（松若詞に如何に安千代未だ此代にあるかなきかさ問ひ給へば)。(答ふるものは竹の世原の松風に空飛ぶ鳥の羽音斗にて愈々哀れは増さりける)。松若殿も次第々々におとろへて七日に當る扨も午の上刻竹の代原の朝の露と消へ給ふ御側十八人の士は此由一目見て最は力に及ばず皆一同に肥前屋形に亂れ入らんとは思へども多勢に無勢力に及ばずと皆はた下へ打寄て腹十文字かき切て朝の露と消へにける隆信この由聞し召し直ぐに六八の女中を御前に召され如何に方々御身達は暇取らする何國の里にも落ち行けとのた

まへば女中勝の前御返事申す樣嗚呼情なき隆信樣の仰かな某が廿の時より御乳を上げしに姫君さへも御助けなく數ならぬ我々共へ御暇賜はればとて國へ落行き如何せん兎にも角にも姫諸共にと云ふより早く皆思ひ〻〻に淸く自害を致さるゝ未だ惜しかる歲の勝の前が廿八侍從の前が廿六千壽の前が廿五侍從廿三少將十八小櫻が十六何つれもおとらん花盛り夜半の嵐に誘はれて散りて行くこそ。「一段何より物の哀れなり」。是は扨置茲に又隈部副島田尾の人々は此序に赤星が領地を手取りにせんと皆思ひ〻〻に我が手斗を引具し

て隈府の城を十重廿重に取圍み。「大かん吐氣の聲をドッと揚げければ」。赤星殿は此由一目見て以の外に打驚き扨は中々夢かうつゝかまぼろしか夢ならばさめても行けうつゝならば消へても行けまぼろしならば暫しが程は消へやらで愈々哀れは増さりける去れど又斯くては叶ふべからずと猛く心を取り直し城門へ火を掛けて天も霞と燒き捨る住み馴れし割府の城を袖白雪と振り捨て八代差して落ちて行く跡よりは。〔くずれ〕敵は群がり繁く慕ふて追掛る玆に赤星の郎等村上兵部左衞門綱高迚大剛の勇士なりしが此由見るより斯くて

は叶ふべからず某一人跡にふみ止まり防ぎ矢射て人々を落し申さんと後陣遙に引下り頓て大音揚げて名乘る樣茲に扣へしは赤星の郎等に村上兵部左衛門綱高迚名を得たる强弓の精兵矢次ぎ早の手きゝなり汝等共よく見よかゝる矢先きに敵は嫌ふましと五人張に十五束差し取引津め射る程に生死は知らねど三十六騎は射て落す最早矢種も盡きぬれば持たる弓をガラリとなげ捨て三尺六寸の大太刀を拔ぎ持て群がる大勢が中へ割て入り當るを幸ひ爰を詮度と世に烈敷火花を散して攻め戰ひしが向ふ敵七八騎は打取り其身も數ヶ

所のきすを蒙り」。迚も叶はん事なれば駒より飛下り小高き所へ馳上り腹十文字かき切て朝の露とぞ消へにける未だ惜しかる歳の卅一惜しまぬ人こそなかりける漸々此隙に赤星殿は虎口を逃れ八代差して落ち給ひ八代の慈眼寺正福寺彼の二ツの寺を深く頼ませ給ひ終夜百萬邊を唱へ兄弟の追善を營み給ひて三歳が程は。「段落日月送りておわします」。

同二段

去程に期くて三歳も過ぎ行けば徳の口より夜船に召され薩摩を頼みに下らせ給ふ順風よければ帆を揚けて程もなく出

氷。「段落米の津に着せ給ふ」。「大かん其の頃米の津は島津義虎公の御持なれば」。直ぐに案内乞ふて義虎御前に參り如何に申さん義虎殿某は肥後に於て赤星源次綱明と申すものなり三歳以前肥前に於て强敵士隈部左馬之介親興と申せしものゝざん言に依り兄弟の子供を無殘に殺され其上敵に攻められ未だ太刀も揚らん次第なり何卒肥前方に一度弓を引て給はれ義虎殿と涙を流して賴みければ義虎公聞し召し扱は中々。『中かん代に無殘聞くよな次第かな』。其儀ならば是より北に當り大口と云へる在所に新納武藏の守忠元迚弓取一人お

わしますを深く御頼みあれと案内一人付け給ふ赤星殿は力に及ばずと涙と共に義虎御前を下りける夫婦打列れ面は月日にさらされすそは露袖は涙に打しめり伊勢編がさで顏隠し代は逆に竹の杖ツク々々と兄弟の子供の事が彌增る名所舊跡尋れば音に名高き盤若寺越を輕く召され急がせ給へば此處は早麥刈表大口に成りぬれば直ぐに案内乞ふて武藏殿に御對面なされ彼の事頼み給へば武藏殿承り扨は中々。『中かん代にむざん聞くよな次第かな』。其儀ならば是より東に當り日洲佐土原と云へる在所は島津中務家久迚軍奉行の御

在ます彼を深く御頼みあれ左もあらば此數ならぬ武藏にも一番に參り島原にて功名致さんと左も潔よく返答し案内二人付け給ふ赤星殿は又も力に及ばずと直ぐに大口を御立ち成され名所々々尋ぬれば音に名高き高鼻越を輕く召され眞幸五ケ所をかけ通り白鳥山を伏し拜み野尻紙屋を馳せ通り急がせ給へば程もなく。「段落日洲佐土原にぞ着せ給ふ」。直ぐに案内乞ふて中務御前に參り如何に申さん中務公某は肥後に於て。『中かん赤星源次綱明と申す者なり』。三歲以前肥前に於て强敵士隈部左馬の介親興と申せし者のざれ言に依り兄

弟の子供をむざんに殺され其上敵に攻められ未だ太刀もあがらん次第なり漸々此處迄參り候なり何卒肥前方に一度弓を引て給はれ左もあらば代々の御恩如何でか報ずべしと頭を地につけ涙を流して頼み給へば中務公聞し召し。「大かん扨は中々以の外なる仰かな」。當國は矢崎合戰以來赤星殿は大敵肥前隆信は淸和源氏の末なれば弓矢に取ては味方なり其儀無用々々と御意下る赤星殿は心も亂れ氣も絕へて最は力に及ばずと涙と共に中務御前を下りける是は扨置茲に又中務公の御嫡子又七殿と申せしは今年十三才にならせ給ふが

赤星が斯くの次第をあわれと思し召し直ぐに中務公の御前にひざまづき如何に申さん父上様。『中國主が國主に加勢を頼むは代にある習ひ』。たとひ大敵にもせよ夫れ武士は昨日の敵も今日は味方となり今日ある味方も明日の仇何卒肥前方に一度弓を引て給はれ左もあらば此數ならぬ某にも二ツの歳を頂き十五才と罷成り御馬の先きに罷出島原にて功名致さんと勇み進んでのたまへば中務公聞し召し又七殿の心を感んじ其儀ならば早く赤星を呼び返せとのたまへば又七殿は大きに悦び直ぐに御前を罷立ち自ら門外に立ち出て

赤星を呼び返し給ふ赤星殿は斜に悦び又も中務御前に參りける中務御掟に如何に申さん赤星殿當國とても島津義久が圍みの地なれば治定返事は致されぬ左れど又義久に御意を伺ひ兎にも角にも弓引かでは叶ふまじとのたまへば赤星殿は斜に悦び三重さがりて三度の拜をなし頓て旅の假屋に下りける夫より中務公は。〔くずれ〕佐土原小路々々に島原よせこ觸れさせ給へば我も々々と進兵中務御手に七百騎又七殿御手に三百騎都合一千餘騎にて早佐土原を御立なされ〕。何事も勝目の坂を打越へて去川を死出の山三途の大川と打渡り

最早庄内三俣日は高城と打ち過ぎて都の城に一夜の宿陣召されける直ぐに其の夜は北郷一雲殿へ御内談召されしが。「一雲心得たりと云ふ儘に直ぐに都の城中へ島原攻めさせ給へば我も〳〵と未だ時刻も移さん其暇に五百餘騎は只やみ〳〵と馳せ集り」。早夜も明けしかば都の城を御立ちなされ最早本土原三重町過れば元服の渡を輕く召され平羽瀬すぐれば夜は深更の峯を打越へ糸原をも打通り心安くも通り山駒は立ねざ牧の原急がせ給へば程もなく福山の宮が浦にぞ着せ給ふ夫より中務公は浦〳〵の兵船廿餘艘を御

催し宮が浦より夜船に召され先一番に弓手に見へしは櫻島妻手に見へしは源氏の氏神正八幡を伏し拜み加治木の里を詠むれば音に名高きじや王嶽嵐に花の數散りて流れて出る黒川や此處は帖佐の小松原心岳寺をも伏し拜み君に大崎龍が水御船の明神伏し拜み暫しは此處に浮かり船裏吹く風に帆を揚げて今朝の嵐に早鹿兒島の。「段落春日の里にぞ着かせ給ふ」。直ぐに五社御參詣思ひ々々に祈願の程は限りなしみとりは風に靡き柳の町をも打過ぎて浮世を廻る車町夫より中務公は御屋形に參り義久公に御對顏なされ赤星が斯くの

次第を御申しあれば義久公聞しめし其儀ならば弓引かでは叶ふまじ軍は勢の多少に依らず時の大將の運に依るべし此度の戰は中務父子と御意下る暫し御內談召されしが夫より直ぐに〔鹿兒島小路々々に島原よせと觸れさせ給へば我も々々と進む兵其名記るすに先ツ一番に御一門に取ては島津中務御父子御同苗圖書の頭忠長島津主衞門の尉種子島大膳の太夫其外士大將に取ては先一番に新納武藏の守忠元上原長門の守川上三河の守喜入攝津の守忠政樺山權左衞門の尉久高入來の院又た六重時阿多長壽院盛淳山田正巖押川

強兵衛鎌田寛政伊集院久治宮里野村弟子丸梅北某伊勢彌九郎貞正中にも河田駿河の守川上左京久堅稲留左京猿渡右京出水方に取ては先一番に島津義虎公を初とし御同苗伯耆守町田出羽の守平田和洲村田狩之介等を先きとして」御一門外に士大將廿餘人惣勢一萬三千餘騎にて早鹿兒島を御立なされ鶴丸山を跡に見て音に名高き水上坂を輕召され腰は掛ねど横井町間だ遙の五本松君の心は清淵涼み松伊集院六郎坂を輕くめされ弓はなけれど矢立原城はなけれど城の町急がせ給へば程もなく市來の港に着かせ給ふ市來の港に一夜

の宿陣召れける大隅薩摩遠國なれば肥前に合する旗廿四本と聞へける夜も明けしかば市來の港を御立なされ佛の前ではあらねども佛生橋をも打渡り二度と歸らん薩摩山。『大かん死出の山ぞと打越へて』。敵に向田川内川を三途の大川と打渡り直ぐに新田八幡へ御參詣なされ中務公御祈願に南無や八幡大菩薩此度貪欲無道の隆信を何卒打たせ給へかしと深く御祈願召されつつ頓て川内を御立なされ西方阿久根をかけ通り高城の小路を打すぎて急がせ給へば程もなく出水米の津に着せ給ふ義虎公の旗揃へ米の津にて三日がほどは軍

評定取り々々なり茲に川上三河の守上原長門の守彼の人々は薩摩に於て兼て物に馴れたる屈竟の兵なれば天草島へ打渡り天草殿へ此由かくと告げければ天草殿は心得たりと云ふ儘に直ぐに足輕雜兵五百餘騎をすぐり出し薩摩方へ加勢として渡さるゝ頓て此由中務公へかくと申上れば中務公は斜に御悅び直ぐに御馬は德の口へ廻さる夫より浦々の兵船三百餘艘を御催し矢筈が嶽より吹きおろす嵐と共に舟押し出す名所舊跡浦々詠めて面白や先一番に。『中か夕生きて今朝早あらはれ出し者はわらび島』。瀨崎笠山三日月山を後に

見て時に渡せせば今浦本浦唐木崎笛と大鼓はなけれども神樂崎をも打すきて敵の爲にはしの島味方の爲には命長島。今日の日も早呉羽鳥一夜の宿を輕島敵に向へば荒江崎夜はほの〴〵とあこう島朝日に向ふ日の島や寢亂れ髮のかつら崎君はなけれども御所の浦おしは住まねど池の浦名殘り惜しさの姫の浦風に柳の瀨戸を打すぎて五月中ばの麥の浦三角の瀨戸を漕ぎ出て今朝の嵐に早島原の。「段落高濱へぞ着かせ給ふ」。すぐに島原の安德寺に御陣召されしが夫より中務公は軍の手分召されける先一番に稻留左京猿渡右京五百餘

騎にて島原口の固なり島津主衛門の尉を初め新納武藏の守種子島大膳の太夫彼の方々は三千五百餘騎にて野首の陣に籠り玉ふ島津義虎公を初めとし御同名伯耆の守町田出羽の守彼のかた〴〵は二千餘騎にてからめ手口の固めなり伊勢彌九郎貞正河田駿河の守川上左京久堅彼の人々は一千五百餘騎にて桑原の陣に籠りける島津中務御父子川上三河の守上原長門の守彼の方々は殘りの勢を引き具して總陣へ籠り玉ふ足輕雜兵五百餘騎を勝り出し之れは後先陣の御手當なり頓て此由肥前方へ使者を遣はさる使者は案内乞ふて内へ

入り頓て隆信殿へ此由期くと告げければ隆信殿はから〳〵と打笑ひ愚人夏の虫飛んで火に入る風情かな音に聞く島津兄弟を此度我手を以て安々と打ち亡ぼし三ヶ國を我が手に入れ我九洲九ヶ國の主となりて子孫永く榮花に榮へんと。「くずれ勇み進んで勢揃へ六ヶ國へ島原よせと觸させ給へば我も々々と進む兵先一番に鍋島加賀の守直重田尻副島隈部左馬の介親與はくし刑部和田民部伊東常陸守同苗縫の介野中大膳吉弘嘉兵衛の尉宗晴小川武藏の守寺山陸奥の守を初として」。士大將九十餘人惣勢六萬八千余騎にて龍造寺隆信を

惣大將として九十三本の旗を靡かせて吉日ゑらばれ肥前の城下を御立なされ島原へと志す此人々の勢の程は如何なる勇士も面をそばめ中〻。「段落恐れんものこそなかりける」。

○三段

去程に肥前軍衆は薩摩方を一目見て案にも違はん小勢かないら高珠數ではあらねども手の内にてもまんと勇む勢荒鷹が小鳥をねろふて「段落勇むが如くなり」。『大かん薩摩軍衆は肥前方を一目見て」。此度の戰は薩摩に再び歸るとは皆思ふなよ猪武者ではなけれども向ふたる敵は只一筋に切て通れと

諸軍勢に下知をなし薩摩に二心つかはん其爲に三百余艘の兵船は皆島原の高濱に引き上げて一同に火を掛け天も霞と燒き捨る薩摩方をよく〲物にたとふればかごの鳥網代に籠る魚さかや前は大敵後は大海左右は岩石そばだちて洩て行べき様は更になし。「大是は扨置き茲に又」。河田駿河の守は薩摩に於て兼て傳へし兵道の達人なれば淸水が谷に下り夜の間に七度の氷をかゝり天に向て祈り給へば其夜源氏の氏神正八幡の御夢想に此度の戰は肥前は敗軍薩摩の勝軍と神慮にましませば難有やなと河田殿は大きに悦び頓て此

由中務公へかくと申し上れば中務公は斜に御悦び薩摩方の心を勇めん其爲めに陣屋々々に此由斯くと觸させ給へばこれを勢に稲留左京猿渡右京五百余騎を引き具して明けの日の卯の刻計りに成りぬれば。〔くずれ〕濱手に三度の吐氣をドットと揚げ一ッかいを相圖として切て出れば肥前方隈部副島が大勢に卸し合はせ追つ追はれつ受つ流しつ三度の太刀打四度の追込五度の戰六度の合戰七八度目にはしのきを削り鍔を割り切葉の金もみぢんになれと代に烈敷爰を詮度と火花を散して戰ひしが痛はしや薩摩方は朝だちの戰に稲留左京

猿渡右京五百余騎は只やみ〳〵と打れける」。未だ惜しかる歳の稲留が卅一猿渡右京廿八惜しまぬ人こそなかりける去れど又大敵の隈部親興は打取たり是は扨置茲に又島津主衞門の尉を初とし新納武藏の守種子島大膳の大夫彼の方々は三千五百余騎にて。「くずれ野首の陣より切て出れば肥前方小川武藏の守が大勢に卸し合せ爰を詮度と代に烈敷戰ひしが向ふ敵二千余騎はやみ〳〵打たれける」。最早是迄なりと云ふ儘に勝吐氣ドッと揚陣所差して引て行く爰に又島津義虎公を初御同名伯耆の守彼方々は貳千余騎にて。「くずれからめ

て口より切て出れば肥前方寺山陸奥の守が大勢に卸し合せ爰を詮度と戰ひしが陸摩方危く見へけるを中務公總陣より御覽なされ斯ては叶ふ可らずと御旗本の勢を一ッになして肥前方大勢が中へ横入をぞ召されける追つ追はれつ受つ流しつ西より東北より南くも手かくなは十文字八ッ花形と云ふ儘に爰を詮度と必死になつて戰ひ給へば痛しや肥前方は小川武藏の守寺山陸奥の守を初さし屈竟の兵一千余騎は只やみ々々と打たれける」。其外足輕雜兵共に至る迄此處彼處の谷のつまり々々に切て落さるものこそ數知れす茲に又川上左

京久堅は戰は今を花と見て直ぐに我手斗を引き具して桑原の陣より切て出肥前方寺山が死したる旗をうばひ取り肥前軍衆に様を替へ陣屋々々をあなたこなたとかけ廻りしが鍋島加賀の守直重にハタト行逢へり如何に申さん鍋島殿某は士の体もなし只今島津方横入の業に目がくれて君隆信公の御本陣をハタト見失なへり何卒敎へ給れ鍋島殿とありければ鍋島も勢を見れば薩摩勢旗印を見れば肥前方暫しが程は呆れ果て居たりしが肥前方も運や盡きるらん。『中か大荒敵を味方の勢と心得て』。我君隆信公はあなたに見へし温泉の

小松原に御側卅六騎を召れ床机に腰を掛け母衣掛武者にておわします急ぎ参られよと敎へける川上殿は斜に悦び鍋島が敎の通り温泉の小松原に攻め登り見れば案に違はず隆信は御側卅六騎を召れ母衣掛武者にておわします最早手の内と心得て直ぐに。〔くずれ〕其日の裝束をハタトあらため頓て大音揚げて呼はる樣如何に申さん隆信殿某を如何なる者とや思ふらん薩摩に於て島津義久が郎等に川上左京久堅とは某なり此度赤星兄弟の子供の恨みの太刀を受けて見給へと云ふより早く切て掛れば隆信御掟に如何に川上は薩摩に於て

ゆゑある武士がゆゑなき武士なら日下に廻れとありければ川上殿はカラ々々と打笑ひ士が士を打つに日下日表の差別あるましと云ふ儘に三尺六寸の大太刀を抜き持て隆信の弓手に廻り首を水もたらさず打落す御側卅六騎は此由見るより主を討たせて叶ふましと切て掛れば川上殿は隆信を討たる勢に爰を詮度と戰ひ給へば痛しや三十六騎も只一ツ枕に討たれける」。仕すましたりと云ふ儘に勝吐氣ドット揚け隆信の首を太刀の切先きに貫ぬきて本丸の陣を心静かに引て行く頓て小松原にも成ぬれは鍋島副島彼の兩大將の者共は

此由一目見て以の外に打驚き扨は中々薩摩軍衆が何時の間に奥の陣に洩れたかな。「くずれ我君の敵何國迄も逃すましと云ふ儘に切て掛れば川上殿は大音揚げ向たる敵は只一筋に切て通れと諸軍勢に下知をなし群がる大勢が中へ面も振らす割て入り爰を詮度と火花を散して戰ひしが痛しや肥前方向ふ敵五百餘騎は討たれける」。最早是迄なりと云ふ儘に勝吐氣ドット揚げ陣所差して引て行く頓て中務公へ此由かくと申上れば家久公斜に御悦び薩摩方の心を勇めん其爲に小高き所へ馳せ上り大音揚げて。「大かん肥前方龍造寺山城の守隆

信を」。川上左京久堅が討ち取ッたりと勝吐氣をドット揚げ給へば此れを勢に三ケ國の勢を一ツになして落る肥前の大勢にかけ合せ追つまくりつ攻めければ痛しや肥前方は秋田の水ではあらねどもつまり々々に切て落さる者こそ數知れず是は扨置茲に又中務公は又七殿を御前に召され如何に又七『中かん唐士の虎は一日に千里をかけてかけ戻る』。一身を捨て一毛をおしむ夫れ武士は幼き時より武藝を勵み名を末代に殘置人は一代名は末代必ず未練致すな未練致しては苗字の恥辱家の恥ぢ汝島津の家に生れ來て此度の戰に肥前方名

ある兵討取り我に見せばやとの給へば又七殿畏り頓て御前を下りけるかゝる處に肥前方。「くずれ鍋島加賀の守が落行く處を目に掛け給ひ駒引寄せ打乘り頓て大音揚げて呼ばる樣其許に落ちさせ給ふは肥前の大將鍋島殿と見へにける何國迄落ちさせ給ふぞのがすまじと云ふ儘に駒を飛して追かけ給へば鍋島も落行駒の手綱を引き止め」。暫し思ふ樣主は討たれる手勢はなし最は力に及ばすと。駒より飛下り弓の本つる切り放し降參するこそ哀なり又七殿御掟に如何に申さん鍋島殿此度の戰は赤星が兄弟の子供の敵戰の事なれば國

取る迄は及ぶまじ左あらば肥前の城は御邊に預け置くとの御掟なり鍋島殿は斜に悦び三重下りて三度の拜をなし頓て肥前を差して落にける去れば中務公は此度の首つもりを召されしが肥前方には壹萬八千余騎と聞へける薩摩方には上下共に八百余人扨も打死す頓て隆信の首を赤星殿へ賜はりければ押頂き薩摩方を軍神摩利支天とぞ伏し拜む其後八代御前に賜はりければ女心のはかなさに此首を見れば兄弟の子供の事が彌増さるとて烏丸の足駄にてけり上けり下け七度目におさめ置く川上殿は此由一目見て。「大かい以の外に腹

を立」。士が太刀の先きにて取たる首を女の手足に掛けては如何せん中務御掟に如何に川上古より女童と云ふとあるが誠なりと漸々川上殿の心をなだめ給ふ其歳の年號申せば天正十二年頃は五月廿四日なり其日の支干は源氏の氏神。「段落正八幡の御縁日」。世の中は何と聞ても唱へても浮は世の中つらきは隆信義理は薩摩方物の哀れを留めしは赤星の兄弟の子供にて。「段落諸事の哀れをとゝめたり

註解　當赤星は段物中の長歌にして他のものより餘程面倒なる歌にして殊に初段の如きは多く中かんの節を用ゆべし何となれは勇壯なる歌には大かんを好しとしても悲哀ある歌に大かんにては餘り強く去りとて地音斗にては歌を弱むるの恐れあり依て中かんの多

からんを要す初段は崩二ヶ所吟替及中間に二ヶ所の切あり二段は崩四ヶ所中間の切り三ヶ所あり三段に至ては崩六ヶ所あり中間の切ふし終りは那須野等の如く跡の切を謡ひ夫れより最終の節を謡ふべし

## ○木崎原（初段）

倩々世間の現象を觀ずるに積善の家には餘慶あり積惡の家には餘殃あり尤。「段落愼むべきは此道なり」。「大かん玆に薩隅日三州の御大守」。島津修理の太夫源の義久公と申し奉るは忝くも淸和天皇の御苗裔鎌倉の征夷大將軍源の賴朝公の御子左衞門の尉忠久公より以來十六代目の御嫡孫なり誠に文

武二道の名將にて上を敬ひ下を撫て仁義正敷在せば靡かん草木はなかりけり御舍弟には兵庫の頭忠平公左衛門の尉歳久公中務大輔家久公とて何れも劣らん文武の名將なり其外御家の子郎等に至る迄普代の好みを忘れず皆忠勤を勵ませば古今稀なる御果報と近國他國の者までも羨まざらんは莫りけり。

「大かん是は扨置茲に又」。大職官鎌足公の御末に伊豆の國の住人伊東入道若心が末孫に伊東左京太夫義祐迚弓取一人おはしますしかも其比日向の國都の郡に住み給ふ其心飽迄不敵にして仁義の道を學ばず下を憐む心なく只我が意

に任せて擧働せば恐れん者こそなかりける去れば古人の言葉にも。『中かん君臣を見る事手足の如くするときは』。臣君を見る事腹心の如くす又君臣を見る事土芥の如くする時は臣又君を見る事只寇讎の如くす曰く義に從ふ時は聖なり諫に從ふ時は賢なり然るに義祐道に違ひし有樣を普代好みの家臣共諫言すと雖會て用ひる事なく却て恨み遠ざかる。「段落心の内こそ殘增しや」。「大かん大欲心の余りにや」。大隅薩摩に發向し我三ケ國の主となりて子孫長く榮花にさかゑんと明暮手だてを廻らせど飯野の城には兵庫の頭忠平公は智仁勇

の御大将なれば中々小勢を以て叶ふべき様は更になし去れば球磨の城主相良に加勢を乞はん迚家の子に伊東加賀の守祐安を近づけ事の様子を云ひ含くめ相良方へぞ遣はしける祐安かしこまり直くに球摩を差して急がるゝ頓て球摩にもなりぬれば案内乞ふて内へ入り頓て相良に對面し祐安彼の事頼みければ相良返答にようこそ御出候なり必す御加勢申さんとさも潔く返答し先づ門出を祝はんと酒を様々進めつゝ約束違へぬ其爲めに黄金作の太刀一振加賀の守へぞ引かれける祐安悦ぶ事限りなく約束かたく相きわめ。「一段落日向を

差してぞ歸りける」。頓て大將義祐に此由斯くと申上れば義祐悅ぶ事限なく家の子郎等を相集め內議評定取り々々なり茲に野尻の城主福永丹波の守。友は兼て仁義を守る勇士なりしが。『中が少しも憚る處なく進み出て申す樣』。某愚案を廻らすに彼の島津殿と申すは辱なくも清和天皇の御末多田の滿仲より以來弓矢の家に譽を取り政道かたくましませば御家の子郎等に至る迄心を變ずるものは稀にも聞ざる處なり之は大敵の剛敵なり御當家の兵共と申すは普代の士少くして皆方々の借武者なり殊に相良の何某は一方心の表裏人

と承る無二の味方と云ひ難し小勢を以て大敵の國へ御働き給はん事は蟷螂が斧を以て龍車に向ふが如くなり事新敷申す事にては候はねど御先祖祐高公は島津久豊公を御聟に取り給ひ其御威光を以て日向の國十一ケ所を打平らげ給ふてケ様に榮花にさかへ給ふ事之れ一重に島津殿の御恩なり。『中かん恩を得て恩を知らんは木石に相同し』。之れは佛神三寳もにくしと思召さるべし先つ我々共が所存には島津殿の御旗下となり給ひ先陣の御働き忠義を盡させ給ひなば九州殘らず島津殿の御手に入るべし其時ころ二ケ國も三ケ國も島

津殿より賜はるべし左ある時は御家長く御子孫繁昌たるべき事何の疑ひが候べきまづ此度合戦の思召は止めさせ給へ平に々々と福永が理を盡して諫めければ義祐は固より。〔くずれ〕無道人なれば以ての外に腹を立今に初めん福永が賢人達の可笑よ理非は兎もあれ角もあれ球摩に約束する上は早打立てや者共とあはてふためき勢揃へ先つ一番に伊東加賀の守祐安同苗新三郎祐信を兩大將として三千餘騎を相添へ先陣に遣はしける頓て義祐再ひ福永を御前に召され臆病至極の福永我に再ひ對面無用々々と云ひ捨て頓て我身も貳千余

騎を引具して二陣に續きて出給ふ」。天理に背く此度の合戰危しと云はん人こそなかりける兎にも角にも義祐の心の中こそ愚なる事とも。「段落何にたとへん方もなし」。

○二段

去程に飯野にまします兵庫の頭忠平公は智恵第一の御大將なれば兼てより伊東方に。「段落忍ひの者を入れおかる」。「大かんいゝいゝいゝ早此由聞し召し方々」。〔くずれ〕方々の味方々々に飛脚を起して告げ給ふ中にも菱刈表の軍兵共は之を聞き勇み進んで人數を揃へ手配し今や々々と待かくる忠平公を初め川上三河

の守忠朝同助七忠堅上原長門の守樺山權左衞門の尉久高喜入津の守忠政阿多長壽院盛淳山田新助黒木播摩の守村尾源左衞門松濟等を先きとして」。屈竟の兵共三千余騎を相勝り木崎原の關所に伏せ置かれ伊東方を菱刈表へ遣過し跡を取切て皆悉く打亡さんと謀り給ふ之れをば知らで伊東勢早加久藤迄は發向す。〔くずれ〕願ふ處の幸なりと菱刈表の軍兵共五十騎百騎は此處の峯彼處の谷のつまり〳〵にはせ集り弓鐵砲をはなちかけおめき叫んで攻戰ふ痛しや伊東方は球摩の加勢を今や遲しと待けれど相良何とか思ひけん一騎の兵も出

さねば今は前後の敵に取圍まれて十方に暮れておわします」茲に伊東の郎等柚木崎丹後の守政家とて文武二道の勇士なりしが黑革おどしの鎧着てびやくだん磨の脛當に兵庫鎖りの小手を差しくわ形打たる五枚甲の緒をしめ三十六差したる大中黑の征矢を負ひ塗り込め藤の弓を持鹿毛なる駒のふとく逞しきに乘たりしが『中か進み出て申す樣』。誠に人の心と河の瀨は一夜に變る習ひにて格護の前にて候へば驚くべき事は更になしかゝる時は命を惜しみ生んとすれば必す死す思切て一方を打破り切て通ふれど諸軍勢に下知をなし

小林差して引て行く亂れ軍の習ひにて我先きに々々と足を亂してにげて行く跡より。〔くずれ敵は群がり繁く慕ふて追掛る丹後の守此由見るより斯くては叶ふべからず某一人跡にふみ止まり防ぎ矢射て人々を落し申さんと後陣遥に引下り頓て大音揚けて名乗る樣茲に控へしは伊東の郎等に柚の木崎丹後の守政家と申すものなり汝等共よく見よかゝる矢先に敵は嫌ふまじと五人張に十五束差し取り引つめ射る程に生死は知らねど三十六騎は射て落す此勢に恐をなしてさしも勇みし島津方の大勢も暫しが程はしどろになつて進み得ぬ」。

# 木崎原

漸々此隙に伊東方は引て行く程に頓て木崎原にも成りぬれば忠平公の御勢。「くずれ此由見るより一度にときの聲をドット揚げ伊東勢は一騎も洩すな皆打取れやとありければ伊東方も此處を破られては叶ふましとおめき叫んで攻戰ふ太刀を合する音は天地に響き未だ勝負も見へざるに川上三河の守忠朝同助七忠堅物に馴れたる屈竟の兵五百余騎を相勝りとある木陰を馳せ廻り義祐の旗本近く縦横無盡に切テ廻れば思も寄らぬ伊東勢風に木の葉の散る如く四方へさつと散りにける」。痛しや伊東方は未だ時刻も移さん其暇に二百余騎は只

やみ々々と打れける其外足輕雜兵共に至る迄此處〻彼處の谷のつまり々々に切て落さるものこそ數知れず是は扨置茲に又伊東加賀の守祐安は心ならずも落る味方の大勢に誘はれて五町斗が程は落ちたりしが頓て兎ある高みへはせ登り。「大かん大音揚げて呼ばゝる樣」。臆病至極の者共何國迄にぐるぞ返せ戻せと味方の勢を大音にて呼ばゝれど引立たる大勢の事なれば更に耳にも聞入れず我先に々々と足を亂してにげて行く祐安思ふ樣我苟も伊東の家の子先陣の大將を承りながら未だ一軍も利を得ず何の面目あつて再び古鄕に歸り

て人々に對面せんいざ打死せんと思切り。崩駒の手綱を引返し大音あげて名乘る樣茲に控へしは伊東の家の子に伊東加賀の守祐安と申すものなり君恩を報せん其爲に討死致す者なり我と思はん者あらば掛れ々々と呼ばはりければ島津方より澁谷上總の守國重今の言葉を聞付けて嗚呼やさしくも返し給ふものかな某は古へ北原が郎等に澁谷上總の守國重と申すものなり日比音にも聞かせ給ふらんと云ふ儘に馬上ながらムヅト組み互にかわす聲の内一度にあぶみをふみ外し兩馬か間に堂と落ち上を下へと返しける國重危く見

へければ國重が郎等二人馳せ續く祐安固より大力なれば二人の者共かいなをかいつかんで此處彼處へカッハとなげ捨て又も國重を取て押へ首を掻かんとする處を弟軍八國直兄を打たせて叶ふましと弓手妻手よりツット寄り柄もこぶしも通れ〳〵と三刀差して弱る處を國重下より刎かへし遂に首をぞ打落す」。祐安が歳を申せば未だ惜しかる歳の三十一惜まぬ者こそなかりけり其年の年號申せば元龜三年頃は五月廿四日なり此人々の手柄の程は天晴勇士の譽れやなと。

「段落感ぜぬ者こそなかりける」。

○三段

去程に加賀の守が郎等二人打洩されて新三郎に近付きケ様。「段落ケ様と告げければ」。「大かん新三郎之を聞以の外に打驚き」。扨は中々安祐殿最早打死とかや兩大將の者共が一人は打たれ又一人古郷に歸りて詮もなしいざ打死せんと付從ふ者共は命全ふ存命て義祐公の御先途を見奉るべし暇取らする是迄なりと云ひ捨て。〔くずれ〕駒の手綱を引返し島津方大勢に打向ひ大音揚げて名乘る樣茲に進みしは伊東の家の子に伊東新三郎祐信と申す者なり君恩を報せん其爲に打死する

ものなりと大勢が中へ面も振らず割て入り爰を詮度と世に烈敷く火花を散らして戰ひしが向ふ敵七八騎は打取り其身も數ヶ所の疵を蒙り迚も叶はぬ事なれば駒より飛下り自害せんとする處を敵勢すき間もなく馳せ來る祐信心得たりと云ふ儘に眞先きに進兵諸ひざ薙て切伏する二番に續く士と引組んで差違ひ共に空敷なりにける」。祐信が死骸を引立見れば帶印に伊東新三郎祐信と名印あり未だ惜しかる歳の十九才惜まぬ人こそなかりける是は扨置茲に又柚の木崎丹後の守政家は只一人後にふみ止まり。「大大音揚げて呼ばはる」

様」。島津方の御内に名ある兵候はゞ申上度仔細候此處へ此處へと招かるゝ勝に乗たる島津方の軍兵共は。〔れ我先きに打取り功名せんとひしくめを丹後の守此の由見るより理非をも知らん奴輩共其處立退けと云ふ儘にさへぎる敵を弓手妻手に切り拂ひ忠平公の御旗本近く眞一文字に駈け來る忠平公此由御覧なされ彼は名ある兵仔細を問へとのたまへば御旗本の兵共丹後の守を中に取圍む丹後の守は駒より飛下り打物彼處へなげ捨暫し問尋してぞ居たりしが如何に方々鳴をしづめて聞き給へ我等が主の義祐は島津殿の御恩を蒙

りヶ様に榮花に榮へし人なれどかゝる逆心を企て天理に背き候得ば此度の戰ひ皆悉く敗軍す家の滅亡遠からず我々共も島津殿に降參申度は候得ど賢臣は二君に仕すと本文の其詞に恥て只今。（吟替）玆にて打死仕る某が幼少の一子候を忠平公に頼み奉る）。（哀れ貴きも賤しきも子を思ふ道に迷ふとは嗚呼今身の上に知られたり此事申さん其爲に）。此處迄參り候なり今は思ふ事もなし首を召され候へと甲を拔ぎ捨て又問尋してぞ居たりしが忠平公聞し召しこわ哀れなる事共かな一子の處は扱置汝降參仕れ平に々々との玉へば丹後の

守此由承りこわ難有き忠平公の御掟かな去あらは御暇申さんと腰の添差抜ぎ持てふゐの鎖りを掻放しあしたの露と消へにける未だおしかる年の卅一惜しまぬ人こそなかりけりこれ等を初めとし伊東方に於て其の名記るすに先一番に。「大伊東加賀の守祐安」。同苗新三郎祐信伊東左衞門の尉長倉勘解由落合源左衞門柚の木崎丹後の守政家伊東權之助伊東源三郎これらは皆大將なり其外一騎當千の兵共百六拾余人は一足も退かす皆聲々に名乗つて打死すヶ樣々々に皆打死しあなたこなたの時刻を移す其暇に大將義祐は虎口を

逃れ都の郡へ落ちて行く島津方の軍勢共勝に乗て追かくる忠平公此由御覧なされ勝に乗つて長追しては悪かるべし先ツ引取れや者共と諸軍勢に下知をなし飯野の城に引かせ給ふ茲に川上上原を初め家老の面々進み出て申す様臆病神の付きたる伊東勢。「大かん何程の事をか仕出すべし」。此序に境目御越し御働きをも候はゝ手に立つものは候ましと勇み進んで申し上れば忠平公聞し召し其儀尤さりながら窮鼠却て猫を嚙み狗犬却て虎を喰むと云ふたとへあり伊東方も未だ名ある兵多くあるべしたとひ亡ぶと雖ど味方大勢損ずべし

勝て甲の緒をしめ時節を待てとのたまひて境目堅く相守り月日送りて御座します茲に又伊東義祐は大隅薩摩に掛け數度の戰に家の子郎等を殘り少なに打なされ無念至極はなかりけり今一度境目打破り數多の城を攻め落し會稽の恥を雪がんと明暮手だてを廻らせど味方の者どもは皆臆病神に誘はれて妻子を隱し落ち仕度をぞしたりける茲に又福永丹波の守祐友は此由つく〴〵と見て伊東殿の滅亡すべき時節は早此時なりと思ひつゝ我度々諫言しけれども諫言耳にさかひ。『中かん良藥は口に苦き習にて』。却て不興蒙る事は無念至極

に思へとも之れは又前世の事なれは恨みる事は更になし傳へ聞は伊東殿も未だ前非を悔ひ給はす此度又大隅薩摩に發向せんと企ある由家の滅亡遠からす君辱めらるゝ時は臣以て死すと云ふ事もあり家臣として今一度諫めざらんは恥の至りなるべしと一通の諫言状を認めワザト苗字はかゝずして夜半にまぎれ伊東の館に忍ひ入り門内に差し置て。「段落宿所差してぞ歸りける」。兎にも角にも福永が所存の程は天晴勇士の擧働かなと皆。「段落感せぬ者こそなかりける」。

註解　當木崎原は三段に分ち初段二段三段にして初段は那須野同樣なれど終りは普通中間の

切りにて止め置くなり凡て段物の二段三段或は數段あるものはいづれも前の段は切り一ツにて止め置き最後の段斗り跡の切りを謠ひ夫より裏聲にて終りの節を謠ふべし二段も初段同樣なれど崩三ヶ所あり三段は崩二ヶ所及吟替あり他は前の段に同し

## ○粟津の露（初段）

名將の下に弱卒なし眞なるかな此言や木曾左馬頭義仲は平家の軍を追落し「段落」頓て都に入替り」。「大勢旭の昇るが如く」。萬我儘に働けば相從ふ者共京中諸所に打散て金銀財寶を奪ひ取る其れのみならず恐多くも法皇を五條の御所に押込め參らせ四十九人の官職を奪ひ百官有司の進退も已か

まに〳〵に行ひつゝ亂暴一方ならぬよし追々鎌倉にぞ聞へける頃は元暦元年正月十三日右兵衛佐頼朝は木曾が狼籍しづめんとて舍弟蒲冠者範頼を大手の大將とし九郎義經を搦手の大將として鎌倉を出發せしめらる範頼に從ふ輩は武田太郎信義加々美遠光一條次郎板垣三郎小笠原次郎を初めとして千葉常胤和田義盛稻毛榛谷金子猪俣芦名高山等都合其勢三萬五千餘騎義經に隨ふ人々は安田遠江守義定大內太郎維義田代冠者信綱畠山次郎土肥次郎其外佐々木兄弟梶原父子熊谷平山佐藤伊勢武藏坊辨慶等都合其勢二萬五千

餘騎』。尾張の熱多に勢揃へして宇治と勢多とへぞ向ひける
爰に佐々木四郎高綱は惣勢出發の日に後れ鎌倉殿へ參上し御暇申し今罷立つ頼朝佐々木を呼返して曰はるゝ樣此度木曾追討の戰には定めて宇治勢多の橋を引くへきなり其方近江生立の事にしあれば川の案内知りつらん宇治川の先陣仕り候へとて生月と曰ふ名馬をぞ賜ひける高綱畏り頂戴しかゝる御惠に逢奉ること『中かん生涯の面目此上なし』。此度の戰佐々木討死と聞召され候はゞ川の先陣人に越さるゝと思召せ又生きて有りと御聞きならば先陣仕りぬと思召されよ

と其まゝ御前を立にけり爰に又梶原源太景季は今度拜領申たる摺墨と曰ふ逸物を黑裝束に仕立てさせ舍人八人に牽せつゝ駿河國なる浮島か原にぞ着にける此處にて小高き所に打上り暫し控へて人々の牽せたる馬を見てあるに蒲殿の月の輪九郎殿の青海波和田義盛の白浪さては畠山の秩父鹿毛等を始めとして大名小名思ひ〳〵の鞍置て幾千萬と數を知らすかゝる内にも景季か摺墨程の駿馬は更に無りけり景季余りの嬉しさに金子十郎を打招き頻に誇りて在る所に佐々木か生月牽き來る渺茫たる春の野の草も萌なん頃なれば生

月勇みに勇み立ち　「大かん鞍も飛ふほど躍りつゝ」。二度三度嘶へける聲はさながら鐘を撞くか如くにて二里の路を隔たる田子の浦まで響きける畠山重忠曰ひけるは今の嘶は生月か聲なり半澤六郎聞咎めかはかり多き勢の中如何でか生月に限るべき生月は蒲殿も梶原殿も御所望あるにも免されさりしを誰人にか賜ひ候はむ重忠重ねて曰ひけるはよもきゝはたがへじ必定生月か聲なりと曰ふ間程なく生月を舍人六人にて牽き來る梶原景季是を見て郎等を以て尋ぬるに佐々木殿の馬に候と舍人は答へて行き過る源太不審晴れやらず

三郎殿に候か四郎殿に候かと再び尋ね問はするに四郎殿ぞと答へける源太是を聞や否や口をしさ遣る方なし再三所望申ても御免しなかりし生月を高綱に賜ふ遺恨さよ大將たる其人の大事を前に置きながら偏頗せらるゝ事やある是程の御氣色にて有らんには千世榮ゆべき世の中ならず思へば電光朝露の如し終に死なんは同しこと日頃佐々木に宿意はなけれど時に取ての敵なり差違へ死すへしと思ひつめ今や〳〵と相待ける斯くとも知らぬ高綱は我手の郎等十七騎相從へて出來り源太頓て詞をかけ如何に佐々木殿生月は下し賜ひ

て候にやと問ひかくる高綱きつと思ふ様誠やこの人生月所望しつるよし高綱拜領せりと實以て曰ふならは刺違へんは必定なりすかして見んと思ひつゝ莞爾と笑ひて申しけるは此間久しく見參せず仰の如く生月を牽ひて候事不審に思召されん承れは蒲殿も御所望ありしに下されずと聞きつれば高綱如きか乞たりとも迚も許されはなき事と思ひ御廐の小平次を相談ひ盜出して候なり今にも鎌倉より御勘氣の御使や來るとひたすらに胸を冷す所也とさあらん体にぞ答へける景季案に相違して實にも容易く盜み出し給へるものかな

其義ならは某も盜むべかりしものをとて打ち笑らひつ諸共に「段落馬をならべて立にけり」。

○二段

然る程に義經の二萬五千余騎川端に臨みて見渡せば敵は川岸に搔楯かいて「段落矢尻を揃へて待かけたり」。「大（かん）川の中には亂杭逆茂木すきまなく」。大綱小綱を流し掛け時しも雪消の比なれば水深くして流れ早く何處を渡らん樣もなし本陣評議の最中に畠山次郎重忠進み出で某瀨踏して御目に掛んとて手勢引き具し五百餘騎馬の鼻を並ふる所平山季

重佐々木太郎澁谷重佐熊谷父子宇治の橋桁打ち渡り早戰を初めたり是に引き違へて佐々木四郎高綱梶原源太景季は平等院の小島か崎へ打向ひ馬を飛して打て出づ梶原其日の裝束は木蘭地の直垂に黑革威の鎧着て三枚甲の緒をしめ繁藤の弓を持ち小中黑の矢負ひ塗鞘の大刀佩ひて鎌倉殿より賜りたる摺墨の名馬に黑塗りの鞍置いてぞ乘りたりける高綱が裝束は褐の直垂に小櫻を黃に返したる鎧に鍬形打ちたる甲の緒をしめ繁藤の弓の眞中取り廿四指したる石打の征矢頭高に負ひいか物作りの大刀佩ひて是も鎌倉殿より賜りた

る『中かん生月といへる名馬に黄覆輪の鞍置いて乘たりけり』景季今年卅三高綱廿五歲にて我後れじと馳向ふ勢龍虎に異ならず源太一段はかり先なるを佐々木後より詞を懸け如何に梶原殿此川は五畿內一の大川なり御馬の腹帶延ひて見ゆるぞやと呼はれは源太さてはと思ひて手綱を控へ弓弦を口にくわへて立ち上り腹帶を解きて引締め〳〵め直す其隙に高綱拔駈けて川へ颯と打ち入りたり源太たばかられぬと安からず思ひ續きて打ち入れたり如何に佐々木高名せむとて不覺なし給ひて水の底には大綱を張たり心得給へと呼はれ

ぱ佐々木さもあらんと思ひ太刀引き拔ひて馬の足にかゝる大繩小繩を三筋はかりも切て落す宇治川流れ早しと雖名馬に乘たる事なれば眞一文字に打ち渡り向ひの岸に打上り鐙ふん張り弓杖つきて佐々木四郎高綱宇治川の先陣と大音擧げて名乘りしは適れ勇者と見えたりけり源太か乘たる摺墨は水にせかれて流れ渡りにければ遙の下に打ち上りぬ佐々木はやがて使を馳せ先陣の樣鎌倉へ注進す源太も先陣とぞ注しける鎌倉殿使に對し佐々木梶原生きてありやと問はせ給へば「段落何れも生きて罷在さぞ答へける」。其後の注進に佐

「一段落」々木先陣とぞ記されける武士の八十氏河のいちはやき午並の程こそ見えにけれ」。

註解　當粟津の露初段は吹雪の敵等の如き中物同様にして崩一ヶ所中かん一ヶ所及中に大かんあり終りは普通段物の初段同様、二段は中かん一ヶ所崩なし終りは外段物の終段同様なり

新案薩摩ひは歌　終

明治三十九年五月十八日印刷
同　年五月二十日發行
明　年六月廿五日再版發行
同　年七月十八日三版發行
同　年八月廿六日四版發行
同　年九月十九日五版發行
同　年十一月廿七日六版發行
同　年十二月廿八日七版發行
同四十年二月廿五日八版發行
同　年三月十日九版發行
同　年四月廿五日十版發行

明治四十年六月廿五日十一版發行
同　年八月十八日十二版發行
同四十一年一月廿八日十三版發行
同　年六月十日十四版發行
同　年十二月五日十五版發行
同四十二年四月十五日十六版發行
同　年十二月十五日十七版發行
同四十三年六月五日十八版發行
同　年十一月十五日十九版發行
同四十四年七月十五日二十版發行

上製定價金參拾五錢
並製定價金貳拾五錢



作曲者　那須祐直

發行者　小川寅松
東京市京橋區南紺屋町十八番地

印刷者　川崎佐吉
東京市京橋區築地貳丁目卅番地

發行所　尚榮堂
東京市京橋區南紺屋町十八番地

